

人と組織の
新・論・点

CATALYST*

カタリスト

橋詰清貫氏

京の友禅染と藍染を融合し、独自の工芸世界を表現する

すべての工程を 自ら手がけ世界の 「オンリーワン」を生む



うちは家内制手工業でね。全部自分でやるんです。畑を作って藍を育てるところから。

収穫した藍の葉を乾燥させたら、水を打って切り返し。1年寝かせて、すくもをつくる。これに灰汁あくなどを加えて藍液にします。

のりで模様を描いて防染した絹を藍液に浸し引き上げて、空気にさらして定着させたら、また防染して浸して……、着物の反物では35回繰り返します。すると最初から防染した部分と後から防染した部分で濃淡ができるでしょう。この濃淡で友禅模様を出すのです。

最初はすくもを買っていたんですが、納得のいく色は自分で作るしかないと思いました。作り方は徳島の生産者に何度も電話で尋ねて、独学でマスターしました。

京友禅の手描き職人として30年。その後、藍友禅に転じてから18年経ちます。京友禅は下絵から防染、色付けまで全部分業になっていて大量生産ができます。だけど私はね、あの分業が京友禅をダメにしたと思うんですよ。職人たちが切り売りする技術を寄せ集め

ても、本当にいい物は作れません。

あらゆることに通じる 「ええかげん」感じる力

私の藍友禅と、京友禅の違いはもうひとつ。人目を惹くきらびやかな色彩を出すために、京友禅は化学染料を使います。それが職人の健康を蝕んだり環境を損なったりするけれども、藍は自然のなかで生まれ、生まれ出るものだということです。

古来、世界じゅうで使われてきた染料ですから、それだけに奥も深い。たとえば藍液は温度やpHのちょっとした変化ですぐに変質してしまう敏感な素材なんです。毎日、甕をかき回して、指先や鼻を駆使し、まさに五感で調整します。焦ったらいけないし、横着してもいけません。人には出せん色を出してやる、などという欲を抱くと藍液はもう台無しです。

「ええかげんの精神」と私はよく言うんですよ。ちょうどいい頃合いを見極める力。それと同時に、ほどほどに、おおざっぱに扱うお

おらかさも持つことなんです。

藍甕をかき回すにも、畑で藍を育てるにも、描いて染めるにも、ええかげんの精神。どの工程にも、私自身の感性が働いている。だから私の藍友禅は世界のオンリーワンだと胸を張って言えるのです。

出会いと時機が 転機を運んでくる

完成まで2年以上もかかる物を作っていて「飽き性なんだ」と言っても誰も信じないでしょうね。でも実は、京友禅に飽きて少し離れた目線で見えたから、分業や健康や環境といった問題に気づけたんですね。飽き性が大きな転機を運んできたのです。

さまざまなお縁もありました。出会うだけなら誰にでも機会は巡ってきます。そのご縁をどうするか、なんです。

何かに違和感を感じているのなら転機かもしれません。そうしたら広く見渡して、時機を感じ取ることです。突き詰めればきっとそのときがわかると思いますよ。

文/石川れい子 撮影/佐藤 洋

PROFILE はしづめ・せいかん

京藍友禅作家。高校卒業後、手描き友禅の道に入り、29歳で独立。1991年に藍友禅工房を設立し、工芸各賞を受賞。5年前からは台北で藍友禅の技術指導を行っている。